

情報共有 AMINEX, NISA班組, 宮野班組 ← プレス対応TM
 分室及び
 (5枚) 本店レク 議事メモ

日時：平成23年4月30日（土）11:00～11:50

場所：東京電力本店3階AB会議室

先方：記者約35名（カメラ4台）

当方：原子力設備管理部 [REDACTED]

原子力運営管理部 [REDACTED]

広報部 [REDACTED]

配付資料

- ・東北地方太平洋沖地震による影響などについて（4月30日 午前9時現在）
- ・福島第一原子力発電所緊急時作業に係る被ばく線量の測定結果について
- ・集中廃棄物処理施設周辺 サブドレン水核種分析結果(4/30現在)
- ・1号機～6号機本館 サブドレン水位計測結果
- ・福島第一原子力発電所 1～3号機プラント状況
- ・福島第一原子力発電所モニタリングカーによる計測状況 他
- ・福島第二原子力発電所モニタリングによる計測状況

質疑：

Q. 最大の被ばく線量は240.8mSvで、その方は、先日、3号機タービン建屋で作業した作業員1名とのことだが、他の二人の作業員の被ばく線量は。

A. 1名の方の外部被ばく線量が191.62mSv、内部被ばく線量が35mSv、合計線量が226.62mSv。

もう1名の外部被ばく線量が178.55mSv、内部被ばく線量が0mSv、合計線量が178.55mSv。

Q. 3名の協力企業の方で内部被ばく線量に差があるが、この理由は。

A. 3名は同じ作業をしており、作業中やマスクの付け外し時など、どのタイミングで接種したのかについては分かっていない。

Q. 200mSvを超えた方は汚染水に足が浸かった人とのことだが、4月25日の会見で内部被ばく0mSvと言っていたが、この時点では分からなかったのか。

A. 免震重要棟滞在による被ばく量を考慮した結果、200mSvを超えたことから、今回お知らせさせていただいたもの。

Q. 200mSvを超えた方は作業させないような管理しているのか。

A. 外部被ばく線量が100mSvを超えたらすぐに内部被ばくの評価し、内部被ばくの結果が出たら機械に足し込み250mSvを超えないように管理している。

また、外部被ばくでも150mSvを超えたら、なるべく現場作業をさせないような管理をしている。

Q. 被ばく線量 150mSv 以上の方は現場作業に出ていないのか。また、200mSv を超えた 2 名の方も面人重要棟にはいないということか。

A. 200mSv を超えた方は作業していない。外部被ばく線量 150mSv 超えた方は現場作業をさせない管理をしているが、内部被ばくと外部被ばくを足して 150mSv 以上は作業をさせないという管理はしていない。

Q. 150mSv を超えて作業につかなくなったりた方は何名いるのか。

A. 3月末までに緊急時作業にかかる外部被ばく線量が 100mSv 超えた方は 21 名のうち、7 名は 150mSv を超えているので、少なくとも福島第一原子力発電所で作業していない。

Q. 福島第一原子力発電所から離れているということか。

A. その通り。

Q. 工程表に基づいて作業している中で、3月末段階で 100mSv 超え手いる方が 21 名いることは想定の範囲内なのか、それとも想定を超えているのか。また、それが今後の復旧作業に与える影響は。

A. 今後、具体的に必要な人数については検討中である。厳しい状況であることは事実であり、このような状況下でまずは線量を受けないように作業環境を良くした上で、どのように作業員を確保するかを検討したい。

Q. 150mSv を超えると作業員がいなくなっていくが、作業員確保の見通しは。

A. 他サイトや本店でそのような作業に関わった方々が福島第一原子力発電所で従事するなどして、様々な方にご協力をいただきながら出来る限りの手配をしてまいりたい。

Q. サブドレンの水位が上昇傾向にあるが、原因は。

A. サブドレンの水位は周辺の環境の影響が大きく、雨が降れば水位が上がり、乾燥した状態が続くと水位が下がる。データを見ても水位が上下しており、必ずしも上昇傾向というわけではない。

Q. サブドレンの水をすぐに排出するような状況ではないということか。

A. 5、6号機は建屋側の手当を順次進めており、1～4号機についても建屋内の確認はできていないが、現時点では建屋からの漏水は大きなものは確認されていない。各プラントの状況を見ており、現時点ではすぐに汲み上げる必要はないと考えている。

Q. 通常時は、サブドレンの水は海に放出していたが、放射性物質が入っているが水をどのように移送するのか。

A. 汲み上げが必要となった場合には、現時点では、発電所内に準備したタンクやメガフロート等、比較的低い線量の廃液を一時貯留する所を持って行くことがあります。

Q. 被災前の水位はどのくらいか。

A. 被災前の水位は確認させていただくが、通常、一定の水位になるとサブドレンのポンプが起動する。

Q. 危険な水位はどのくらいか。

A. 建屋側にどのような影響を与えるかが基準になる。5、6号機については水位を下げたことにより建屋の手当がある程度進んだため、今の段階では危険な状態ではない。1～4号機タービン建屋に水があり、原子炉建屋は確認段階であるため明確な状況は判断できないが、入ってきているとすれば建屋側の漏水になるため、緊急性を要する状況ではない。しかし、2号機については排水作業を進めているため、それに対する影響は少なからずあるかと思うので、今後の状況を確認しながらできるだけ早く対処したい。

Q. 内部被曝の測定はいつどこでしたのか。

A. 3月22日以降、小名浜CCの車載のWBCで行った。また、協力企業の3名の方は放医研で実施。

Q. 福島第一原子力発電所にもWBCがあるかと思うが。

A. 福島第一原子力発電所は地震の影響により使えない。

Q. 使えなくなったのはバックグラウンドが高すぎて使用できないということか。

A. その通り。

Q. 内部被曝についてももっと早く考慮すべきではなかったのか。

A. ご指摘の通りだが、8/22に小名浜CCに到着したのが事実。

Q. これまで、内部被曝を考慮する必要があるとの説明がなかったと思うが。これまでどのような猪表の仕方をしてきたか。

A. 誤解を与えたとすると申し訳ない。集計をしてすぐに示せるデータとして外部被曝を公表してきたもの。外部被曝で100mSvを超えた場合、今後、内部被曝も考慮するとの説明も行ってきた。

Q. 2号機のトレーニングの溜まり水の移送について。2台ではなく1台でやることになったとのことだが、その理由は。

A. 詳細については確認するが、流入量以上は汲み出していることから水位は下がってきており、トレーニングから漏れ出すことは防げている。3号トレーニングも管理し

ていく必要もあり、集中ラドの容量にも限りがあることから、このあたりをふまえて本部で検討中。

Q. 2号トレーナーに設置されているポンプの台数は。

A. 4台あり、1台は2号HWへの移送に使用、残り3台のうち1台を集中ラドの移送使用、1台は未使用、1台は予備用と思う。

Q. WBCは小名浜CCに1台でよいか。

A. その通り。2FのWBCも使えるようになつた。

Q. 2Fが使えなかつたのはBGが原因か。

A. BGとソフトの確認変更作業もあつたかと思うが確認。

Q. 2号トレーナーからの移送について、ポンプ1台だと集中ラドへの移送が400日くらいと長くなるが、今後の作業への影響はどのように考えているか。

A. 順調に移送ができるでいて水位が下がらないのか、どこからか流入があって水位が下がらないのか不明である。T/B建屋側からの流入があり、トレーナー側からポンプで順調に移送できていれば計算通りだと思う。また、地下水が入っているとすると移送に予定より時間がかかると思う。いずれにしてもトレーナーの水位が下がらない理由がわからない状況。

Q. トレーナーの水量、ポンプの送水可能量から所要日数を割り出していたと思うが、最初から計算をしなおすということか。

A. トレーナーの水位が下がっていないかということがあり、所要日数については判断ができない状況。

Q. 5・6号のサブドレンの件。5・6号のT/Bの建屋の中の水位の把握はできているのか。

A. 確認する。

Q. 被曝のような重要な発表に松本がいないのは問題を軽視しているのではないか。

A. 軽視というつもりはなく、もともと所用が合つた中、なるべく早く公表させていただいたもの。

Q. 内部被曝の今後の見通しは。

A. 通常は3ヶ月に1回評価していく。設備が壊れた中、まずは100超の人を優先的に。今後WBCの台数を確保し、頻度も3ヶ月ではなくもう少し細かくやつていきたい。

Q. 4/29 AM11時の1号原子炉圧力の数値が、“プラントパラメータ (105kPa)”

と“1Fの状況 (114.3kPa)”においてそれぞれ公表されているがどちらが正しいのか。

A. 従来の計器に加え、窒素注入以降詳細な数値が測定できる計器を設置し、窒素封入関連情報として提供している。

以上